



TITLE:

香川県伊吹島における出部屋の存続と閉鎖のメカニズム——社会および共同体の変化に関連づけて——( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

伏見, 裕子

---

CITATION:

伏見, 裕子. 香川県伊吹島における出部屋の存続と閉鎖のメカニズム——社会および共同体の変化に関連づけて——. 京都大学, 2015, 博士 (人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19074>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	伏見 裕子
論文題目	香川県伊吹島における出部屋の存続と閉鎖のメカニズム ——社会および共同体の変化に関連づけて——		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、出部屋と呼ばれる香川県観音寺市伊吹島の産屋の存続と閉鎖のメカニズムを、社会および共同体の動向に関連づけながら検討し、そのことを通して、出部屋が社会や共同体、女性にとってもった意味を明らかにしたものである。</p> <p>「序章 産屋研究の視角」では、論文提出者の問題関心が述べられ、産屋に関する先行研究の成果と問題点が整理された上で、出部屋と呼ばれる伊吹島における産屋の意味の解明という本論文の課題が提示されている。</p> <p>「第1章 フィールドについて」で、フィールドである香川県伊吹島および出部屋の概要が明らかにされたのち、「第2章 昭和戦前期における出部屋の産院化」および「第3章 戦後の出部屋を活用した近代医療の導入」で、社会の動向と出部屋との相互作用が論じられている。まず第2章では、出部屋が、昭和初期に社会事業としての妊産婦保護事業において、そして地域の「隣保共助」を重んずる農山漁村経済更正運動の一環として、「伊吹産院」と名づけられて評価され、政府や皇族関連の組織から助成金を受けたことが明らかにされている。そのことで出部屋は古来の「遅れた」風習から由緒ある出産習俗へと位置づけが変化したのであり、新しい意味づけが与えられたことで、出部屋は存続することができたのであった。第3章では、戦後の伊吹島で開業した助産師Nさんのライフヒストリーを通して、出産が医療の対象とされていったことが明らかにされ、出部屋と医療とが矛盾せず両立したからこそ、出部屋が戦後も長きにわたって利用されたことが指摘されている。</p> <p>「第4章 昭和20-30年代における出部屋の利用状況とその変化」と「第5章 昭和40-50年代における出部屋の閉鎖とその後」では、昭和20年代以降に出産した36人の島の女性たちの聞き取り調査をもとに、伊吹島という共同体内部の状況に着目しながら、共同体の動向と、出部屋をめぐる女性の選択や行動との相互連関が検討されている。</p> <p>第4章では、昭和20-30年代の伊吹島において、女性たちが出部屋とどのように関わり、また離れていったのかが考察されている。それによれば、出部屋の利用をめぐるのは、家族構成や家族関係に由来する葛藤やせめぎ合いも存在したが、共同体の内部にとって出部屋は、出産の穢れ観から生み出された規範の全島の維持という意味があったという。というのも、伊吹島は漁業の村であるが、漁業は島全体の経済を支えるものであると同時に、死と隣り合わせの営みでもあり、漁師の船霊信仰に由来する穢れ観に基づき、産後の女性が出部屋を利用するのは当たり前のことだったからである。しかし漁船の動力化は漁の安全性を向上させると同時に、水産資源の減少を招いて漁業不振をもたらし、夫婦で神戸や大阪へ出稼ぎに行くケースが目立つようになった。このように、島の産業構造と家族形態が大きく変化することで、出産の穢れ観から生み出されていた島共通の規範が次第に弱まり、女性たちは、出部屋の代替として実家を活用し、出部屋から離れていったことが指摘されている。</p> <p>第5章では、昭和40年代に出部屋が閉鎖した要因と、出部屋閉鎖後の伊吹島の出産のありようが考察されている。出部屋を利用しない女性が増加した昭和40年代にも島から大家族が消滅したわけではなく、網元をはじめとして大人数での暮らしを存続させる家族もあった。しかし、利用者が激減して空き家状態となり、さらに老朽化も進んだ出部屋は、もはや1ヶ月も過ごせる場所ではなくなっていた。こうして出部屋は閉鎖の時を</p>			

迎えたのである。そして出部屋閉鎖の前後から、女性たちは同年代の女性同士で交わされる情報や周囲の動向、家族の状況、自分の体調などを勘案して、自らの出産場所と産後の居場所を自身で決めるようになっていった。このことは、出産が島のものではなく、家族のものになったことを意味していると指摘されている。

「終章 出部屋の存続・閉鎖のメカニズムとその意味」では、各章で得られた知見を整理し、全体の総括を行っている。それによれば、近代以後の出部屋の存続過程においては、大きくわけて二つの論理が同時に働いていたという。すなわち、出部屋は行政や医療者の側からは、妊産婦保護や近代医療導入の拠点と見なされるとともに、島内では穢れを避ける場所として機能していたのであり、そういう意味で、出部屋は社会の変化を島に導入する拠点であると同時に、共同体で重視されるべき実情を反映する場所でもあった。だからこそ、さまざまな立場の人々の間で出部屋をめぐる互惠関係が長らく築かれてきたということができる。また女性は、共同体の規範に従うか、家族の事情を優先させるか、そしてそのなかで自分の安寧をいかに確保するのか、という視点から自らの出産や産後の場所を選択していったのであり、出部屋の歴史とは、このような切実な葛藤の歴史だったとまとめられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、出部屋と呼ばれる香川県観音寺市伊吹島の産屋の存続と閉鎖のメカニズムを、社会および共同体の動向に関連づけながら検討し、そのことを通して、出部屋が社会や共同体、女性にとってもった意味を明らかにしたものである。

産屋とは、出産に伴うとされる穢れを理由に、女性が出産時ないし産後の一定期間を家族と離れて過ごした場所のことをさす。伊吹島の出部屋と呼ばれる産屋は、産後の約1ヶ月を滞在するためのものであり、昭和45年まで利用された、日本で最も遅くまで使用された産屋の一つである。本論文は、この産屋に焦点をあてながら、これがどのようにして存続し、やがて閉鎖したのかというメカニズムを、社会の動向、共同体の変化、女性たちの意識、という三つの視点から明らかにしたものであり、ここに本研究の第一の意義が存在している。というのも、これまでの産屋研究では、個々の集落における産屋の特徴をつかむこと、産屋の本質を探ること、女性にとっての産屋の意味を浮かび上がらせることを重視した研究が、それぞれの問題関心にしがたって展開されており、一つの産屋に徹底的にこだわり、多様な視点からそれについて論じるということがなされてこなかったからである。それに対して本論文では、伊吹島で活動した助産師であるNさんや、島で出産を経験した36人の女性に対してインタビュー調査を行い、それに文献史料も加味しながら、伊吹島の出部屋について実証的かつ重層的に考察している。

そして本論文の第二の意義は、社会事業の展開という社会の動向の変化が産屋に与えた影響を明らかにしたことである。そもそも出部屋が利用されたのは、伊吹島が漁業の村であり、漁業は死と隣り合わせの営みであるがゆえに、漁師の船霊信仰に由来する穢れ観が根強く存在していたからであった。そういう意味では、出部屋は共同体で重視される規範を反映する場所であった。しかし、出部屋を存続させたのは穢れ観だけではなく、昭和初期に出部屋が妊産婦保護事業や農山漁村経済更正運動の枠組みに組み入れられ、そのことで、産屋の位置づけが古来の「遅れた」風習から由緒ある出産習俗へと変化したからでもある。このような、産屋が社会の動向によって歴史的に位置づけを変化させていくという指摘は、従来の産屋研究には見られないものであり、産屋研究が社会事業史や社会政策史の文脈で進展していく可能性を示唆するものでもある。

さらにいえば、本論文は、出部屋を漁業と深く関わる穢れ観や社会事業として位置づけるだけでなく、助産師を通した出産の医療化、家族の形態などに規定される家族の事情、女性の安寧の追求といった、さまざまな要因の上に出部屋が成り立っていたことを明らかにしており、この点に本論文の第三の意義が存在するといわねばならない。たとえば、伊吹島で初めての助産師であるNさんは、出部屋を拠点としながら医学的知識でもって出産に対応したが、そのことは出部屋を存続させていく一つの要因となっていく。また漁業不振にともなう出稼ぎの増加は、出産後の女性の実家を養生の場所として活用することを可能にした。個々の女性たちの事情によって、出部屋が産後の養生場所として快適な場合も、そうでない場合もあったが、出部屋の存続の歴史は、これらの諸要因が織りなす歴史であるといえる。本論文は、出部屋における共同体と女性との互惠関係や出産をめぐる女性たちの葛藤を論じながら、生業の変化にともなう穢れ観の弱まりによって、出産が共同体の関心事から家族のものへと変化していく様子を描くことに成功している。

これらの点において、本論文は従来の産屋研究に新しい知見をもたらしたということが出来るが、今後の課題がないわけではない。たとえば、出産した女性の夫や

島の有力者などへの聞き取り調査を行うことで、出産した当事者とは異なる出部屋観や穢れ観が明らかになる可能性がある。ただこの点は、研究のさらなる発展のための課題として残されたものであり、これによって本論文の価値が損なわれるものでないことはいうまでもない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年12月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成27年3月24日以降